「四頭の獣」

ダニエル７：１－２８

May.24.2020

ダニエル７：１－２８（パワポ）

Preface

今日からダニエル書の後半部分、旧約聖書の黙示録とも言われるダニエル書７章に入っていきたいと思います。

１－６章のダニエル書前半部では、ダニエルと３人の友人たちハナンヤ（シャデラク）、ミシャエル（メシャク）、アザルヤ（アベデ・ネゴ）が、バビロンに捕虜として捕らえられてきたにもかかわらず、信仰を失うどころか、数知れぬ困難を、信仰をもって生きぬいた姿を見てきました。

彼らは、祖国が完全に滅びるという悲劇を経験しましたが、決して滅びることのない神の国の栄光が、自分たちの人生に、そして置かれたすべての領域において、広がっていく体験をしました。

ダニエル書は、元々、捕虜となったイスラエルの民たちに、勇気と希望を与えるために書かれたものですが、イスラエルの民たちばかりでなく、
目に見える国が滅び、目に見える現実がどんなに絶望的であろうとも、神の国は永遠であり、信仰をもって神の国を生きることこそが、まことの人生なんだということを私たちにも教えてくれました。

そして、そんなダニエル書前半部の中で、ダニエルは、何度も、時の権力者である帝国の王たちに現れた神の啓示を解釈してあげる場面が出てきますが、７章からは、神様が直接ダニエルに与えた啓示が記されています。

Part One

先ほどお読みしたダニエル書７章には、頭に浮かぶ幻という形で、神様の啓示がダニエルに示されていますが、
この啓示の中で、異彩を放っているのが、想像するのもちょっと困難に思えるような、四頭の獣が登場します。

この四頭の獣は、世の帝国や国々の特徴を表わしているものなのですが、
この四頭の獣を解釈するためには、ダニエル２章に出て来た、ネブカドネツァル王が夢で見て怯えた、人の形をした巨大な像と比較しながら、照らし合わせながら見ていく必要があります。

ダニエル２：３１－３３（パワポ）

この巨大な像は、世の帝国や国々を表したものですが、人の形をしています。

要するに、世の帝国や国々は、人を高め、人を誇りとし、人を崇拝し、人を崇拝させ、人のためだと言って、人によって立てられた国であり、まことの神を排除した人本主義に立脚した、人間が一番という帝国だということです。

また、この人の形をした巨大な像は、異常なほどの輝きを放ちながら、その姿は恐ろしいものでした。

つまり、人の手によって作られた世の帝国は、いかにも何かありそうな、とてもすごいものを持っているかのように、装飾し、着飾り、かっこつけ、きらびやかに見せ、威張るために、非常に大きくして、人々を圧倒するというのです。

荘厳に見えるように、デカさと派手さの両方を兼ね備えることに躍起になって回っているのが、世の中の特徴ですね。

以前、中国の万里の長城とロシア・サンクトペテルブルクにあるエカテリーナ宮殿を見に行ったことがあります。
二つとも世界遺産の建造物ですが、まあ、そのデカさと派手さは、本当にすごいものがありました。

宇宙から見える唯一の建造物が万里の長城だそうですが、まあ、デカいし、長いし、すごいし、果てしなく続くように見える壁は、ちょっと異様なほどに圧倒されますね。
ＢＣ２１４年に秦の始皇帝によって作られた６２５９㎞の壁ですが、その作った目的は、威嚇のためです。
人を、敵を威嚇し、委縮させ、恐れを抱かせるために、こんなすごいものが作れる力と技術とお金があるんだぞと、威張るために作られたというのです。

サンクトペテルブルクのエカテリーナ宮殿、これもまたすごいんです。
その広さ、デカさもすごいんですが、何がすごいって、金ぴかなんです。
ものすごーく広い部屋全部、金で装飾されている部屋もありました。
噴水も金ぴかです。　まさに、ロシア帝国の栄華を物語っていると言えるものでした。
このエカテリーナ宮殿は、もう派手派手の金ぴかのきらびやかで、まさに異常なほどに輝いていました。

でも、これまた作った目的が、人を威嚇し、委縮させ、恐れさせるためですね。
派手さと、豪華さで、人を圧倒し、憧れさせるんです。

この二つの建造物共に、いかにも何か特別なものを持ってそうで、すごいものがあるんだと見せつけますが、その内実は、人を怯えさせんばかりの欲望と野望の塊ですね。
あたかも何か特別なものがあるかのように、見せつけるために、大きく、派手に、無理してでも作るわけです。

すみません。人様が誇る世界遺産をこんな言い草にしますと、怒られちゃうかもしれませんが、
でも、結局のところその内実は、人が人に対して、威嚇と虚勢を張り、力でねじ伏せるために、無駄に荘厳に見せているということですよね。

これが世の帝国の、そして、私たち人間の傲慢さです。

Part Two

ダニエル２章にある巨大な人型の像の各部位は、頭が純金、胸が銀、腹とももが銅、足は鉄と粘土です。

この４つの部位は、それぞれが、当時現存したバビロン帝国から、やがて将来現れてくる帝国の文明を表しています。

そして、この像の最も大きな特徴は、頭から足にかけて、金でピカピカだったのが、段々とその輝きを失っていき、材質がどんどん悪くなっていくことです。
金から銀、銀から銅、銅から鉄、鉄から粘土という風にです。

つまり、時間が経ち、歴史が進めば進むほど、帝国の・国々の状態が悪化していくということです。

上から、それぞれ、頭の純金部分がバビロン帝国、胸の銀部分がメディア・ペルシア帝国、腹ももの銅部分がギリシャ帝国、そして最後の足の鉄と銅部分がローマ帝国であり、現代にまで続く部分だと言われます。

そして、それぞれの帝国は、ざっと、バビロン帝国が７０年、ペルシア帝国が２００年、ギリシャ帝国が２７０年、ローマ帝国は５００年続き、ローマ帝国以降は現在まで１５００年が経っています。
国の覇権が移るにつれ、帝国の君臨する期間は長くなっていき、私たち人間の目から見れば、より強固になっているように思えます。

当然のように、私たち人間や社会は、時間が経ち、歴史を重ねるごとに、科学や技術が発達し、社会制度も整備され、以前よりも文明が進み、日増しによくなっていると考えますよね。

現代ならば、飛行機に乗り、パソコンを持ち、インターネットが出来、一人一台スマホを持つようになって、またそれを支える社会制度も整い、以前の文明よりも良くなっていると、そしてこれからはもっと良くなると、考えます。

人の文明は、常にアップグレードしてきたし、これからもアップグレードすると、思い、思わされています。

でも、本質を見れば、外面に現れる姿や形状が変わっているだけで、その内面や精神性は何一つ変わっていません。
むしろ、その精神性は、悪化しているかもしれません。

さらには、神様の視点から見れば、人類はアップグレードどころか、ダウングレードしていると言うのです。

事実、人が作り上げてきた技術文明は、ブーメランのように人類滅亡に向かって行く道具のようになっています。

便利さという大義名分のもと、地球上の木をバッサバッサと切っていき、川や海を汚し、近代化を進めるんだと都市化を進め、主なる神様が造られし自然・天然の秩序を破壊して、色んな問題が生じているにもかかわらず、その流れを断ち切ることは出来ずに、まだ開発し、まだ開墾し続けます。
もうそれしか生きる道がないかのように、流れを止めることが出来ません。

今回のコロナの問題だって、人間の手によって、神が造られし被造物の秩序を壊したこと（自然破壊）が、最も大きな要因のうちの一つだと言います。

映画を見てもそうですね。
人類が良かれと思って作ったウィルス技術のために、人がゾンビ化し、互いに殺し合うとか、大量の核兵器技術によって、人と人同士が滅ぼし合うとか、ＡＩ（Artificial Intelligence）が人類を滅ぼすとか、
最近話題になった映画、パラサイトでも、技術文明を誇る２１世に生きる富裕層と貧困層が、へんちくりんに絡み合って、そこから生じる矛盾によって、結局、殺人を持って終局するという、何とも言えない、メランコリックな感情を抱かせます。

皆さんスマホ好きですか？
スマホなんか、ものすごい文明技術がそこに投影されてますね。

初めてスマホを見た時、指先一つで画面を映していく様子が、近未来的でかっこよかったですね。

指先一つで写真や動画を取り、お金のやり取りをし、物を買い、予約をし、人と連絡し、欲しい情報を得る。
僕の小さい頃でしたら、ドラえもんの四次元ポケットから出てきてもおかしくない代物ですね。

スマホは、総合コミュニ―ケーションツールとも言えるかもしれませんが、
このスマホ、困ったことに、遠くの人とは近くにいるかのようにコミュニケーションが取れるのですが、目の前にいる人とコミュニケーションを取れなくしてしまいます。

目の前にコミュニケーションを取るべきリアルな人がいるのに、その人には目もくれず、スマホの中のコミュニケーションに没頭します。

子どもにおっぱいを飲ませながら、子どもの顔に、愛情たっぷりの温かい目線を注ぐのではなく、スマホに目をやり、子どもに注ぐべき愛情をひたすらにスマホに注ぎます。
そして、やがて子供が成長すると、子どもにもスマホを買い与え、親子一緒にいても、目と目を合わせながら会話することもなく、スマホとコミュニケーションです。

家族と食事をしようが、友人や同僚と食事をしようが、
目の前にいる家族や友人とコミュニケーションを取るのではなく、スマホとコミュニケーションを取ります。

人が目の前にいても、いつもスマホとばかりコミュニケーションを取っているせいか、目の前にいるリアルな人と、どう会話をし、どう親密なコミュニケーションを取ればいいのかさえわかりません。

ドラえもんの四次元ポケットから出てくるほどの、便利な総合コミュニケーションツールのおかげで、一番近くにいる人と親密なコミュニケーションを取ることが出来ないという本末転倒な状態。

近くの人と親密なコミュニケーションを取るという面からすれば、「となりのトトロ」に出てくるような貴重な電話を貸し借りしたり、一家に一台の黒電話の方が、よっぽど優れていたかもしれません。

バージョンアップした、アップグレードした、進化したと称するスマホが出てくる度に、人とのコミュニケーション能力や親密度は、ダウングレードしていきます。
最近では、“スマホ廃人”なんていう言葉まで出てきて、大人ばかりか、子どもにも、“スマホ廃人”という言葉が使われるようになりました。

進化という言葉が、世の中、乱発されています。
もう何にでも使いますね。　牛丼やラーメンにだって使います。
でも、牛丼は牛丼ですし、ラーメンはラーメンです。
牛丼がラーメンになることもなければ、ラーメンが牛丼になることもありません。　ましてや、牛丼に羽が生えることもなければ、ラーメンに足が生えることもありません。　ただ、単純にちょっと味が変わっただけのことです。

世の中、進化という言葉を乱発して、あたかも、何か別次元に飛躍し、新しい時代や新しい感覚が生まれて、過去を遥かに凌駕する世界が誕生したかのように教え、宣伝し、信じてますが、人も社会も進化などしていません。

もちろん、改善しているところはあるでしょう。
でも、“その改善が、果たして改善なのか？”ということは見ようとはしませんし、教えようともしません。

改善したというものを、深く深く掘り下げていくと、往々にして現れてくるのが、犠牲だったりします。
貧しい者はさらに貧しく、痛がっている者がさらに痛み、破壊されたものがさらに破壊され、悪化した関係がさらに悪化している、なんてことはざらかもしれません。

昔も今も、人も社会も、変わらず、（神の前にあって）罪人ですね。

そして、その罪ゆえに、（進化と歌う淘汰主義を正当化し、それに則って、）
世界をダウングレードさせています。
これが、神様の視点です。

これが、ダニエル書２章の巨大な像の姿に良く表れています。
時を経れば経るほど、頭から足に向かって、本質的に、根幹的に、衰え、痛み、悪くなっています。

## Part Three

それまで培われてきた文明を土台に発展させたローマ帝国は、以前のどの帝国よりも、色々な面でずば抜けていましたが、
でも、その内実・内情は、純金から粘土へと変遷したように、悪くなっているというのが、神様の視点です。

ダニエル書２章では、人間のつくり上げた帝国を、巨大な人の像で描写していますが、これが、ダニエル書７章では、海から出てくる獣として、表されていきます。

つまり、神の目から見れば、世の帝国、人の作る帝国は、獣のような存在だということです。

自分よりも弱い存在や国々を、躊躇なく、力でねじ伏せ踏みつぶしてしまう弱肉強食のジャングルのようなところだということです。

人の手によって作り出されるこの世の帝国や価値観は、神の目から見れば、獣でしかありません。

「なんでこうも人の道に外れたことばかりが、世の中にはびこっているのだろうか。」と、あたかも自分は真っ当な人間であるかのように苛立ってしまう毎日ですが、自分自身を含めて、獣のような世界、獣が獣のように行動しているだけのことですね。

ダニエル７：２－３（パワポ）

ここに出てくる大海は、世の中を表し、大きな獣４頭は、世の帝国を表しています。
で、よく見てみますと、変なことに気付きます。

海から出てくる獣ならば、人喰いサメとか、人間ばかりか大きな鯨まで襲う獰猛なシャチならばわかるのですが、
海から出てくる獣がみんな、獅子だったり、鷲だったり、熊だったり、豹だったりと、海にそぐわない獣ばかりが出てきます。
つじつまが合わないんです。

海からは海の生物、陸からは陸の生物、空からは空の生物が出てきてしかるべきなのですが、海から陸や空の獣が出てきます。

つまり、もうこの時点で、本来あるべき秩序を乱す存在として登場してくるんです。

神の摂理と神の愛の下造られし、世界の秩序を乱しているのが、世の帝国であり、国々であり、人間であり、人間が作り出す価値観だということです。

それでもなお、この４頭の獣とも、天からの風によって、かき立てられた海から出てきています。

“天からの風”というのは、神の主権を表す言葉なんです。
つまり、４頭の獣は、獣ですから、自分たちの意思で、勝手気ままに、海から

出て来たと自ら思っていますが、神の許しがなければ出てくることも、立つことも出来ない存在だということです。

いと高み神様は、王を廃し（廃らせ)、王を立てる方だということを、先週まで何度も見てきました。

世の帝国が栄え、衰えていくタイミングを支配し、決めておられる方は、やっぱり聖書の神様だということを表わしているんですね。
どの権威や権力も、神の許しなしには、存在し得ません。
人ではなく、どこまでも、神が主体です。

Part Four

ダニエル７：４（パワポ)

鷲の翼を持った獅子が現れてきます。　２章の純金の頭の部分にあたります。
つまり、バビロン帝国のことですね。

ＢＣ６１２－５３９の７３年間、地の王者である獅子と、空の王者鷲のような力と獰猛さで、中東世界を支配していきました。

今でもバビロンの遺跡には、獅子の石像が彫られているのが発見されています。

膨大な軍事力、莫大な経済力、すぐれた法治制度と行政システム、また自分たちの文字を持っており、ユーフラテス川の流れを引き込んで都市を作ってしまうほどの高い技術力を有する、当時最高の文明国家がバビロン帝国です。

またネブカドネツァルという秀でたリーダーの登場で、繁栄を極め、大きな領土をその支配下に治めました。
しかし、ネブカドネツァル王が死んでから国が衰退していきました。

４節の鷲の翼が抜き取られて、人間のようになったというのは、学者によっても見解が違うのですが、単純にネブカドネツァル王が死んで国が廃れて行ったことを表わしていたり、
ダニエル書４章の時学びましたが、野の獣以下にまで落ちぶれたネブカドネツァルが回心して、聖書の神を褒めたたえる者に変えられたことを表わしているとも言います。
私個人的には、両方の意味とも表していると思っています。

いずれにしろ、稀代のカリスマリーダーに支えられていたバビロン帝国は、どんな後継者が立っても、ネブカドネツァルの時のような賑わいにはなりません

でした。

そして、その後

ダニエル７：５（パワポ）

熊のような獣は、ダニエル書２章の像の胸の銀部分と一致します。
バビロンを滅ぼしたメディア・ペルシア帝国です。
ＢＣ５３９－３３０の約２００年間、君臨しました。

この熊のような獣が、横向きに寝ていたというのは、始めはメディア・ペルシアでしたが、やがて、メディアがペルシアに吸収合併されて、ペルシア帝国となったということです。

また、この獣の口の牙の間には、３本の肋骨があったと言いますが、この３本の肋骨は、バビロン、リディア、エジプトを食らい、巨大帝国になる礎を築いたということです。

そして、「多くの国を食らえ」というのは、ペルシア帝国の支配下にはいった国々が多かったということです。

インドの端から、中東世界、ヨーロッパの一部やアフリカに至るまで、バビロンとは比較にならないぐらいの大帝国を築き上げました。

広大な領土、莫大な富、巨大な軍隊、多くの人口と、ペルシアがいつも誇ったのは、その数字、数でした。
今も、人間世界は、変わりなく数、数字を誇ります。

でも、やっぱり、２００年続いたペルシア帝国も滅びます。
そして、出て来た３頭目の獣。

ダニエル７：６（パワポ）

今度は、豹のような獣です。ダニエル書２章の腹ももの銅部分です。
ギリシャ帝国ですね。

豹は、獰猛かつ素早いハンターです。
ギリシャ帝国と言えば、かの有名なアレキサンダー大王ですね。

２３歳で王になったアレキサンダーは、たった１０年で、ペルシア帝国よりも広い領土をその支配下に治めました。

ヨーロッパから始まったその征服戦争は、インドの端まで及びましたが、インドの端まで行ったら、「もうこれ以上征服する地がない。」と言って、泣いたそうです。
豹のように獰猛で、素早いハンターのような王が、アレキサンダー大王でした。

また、この豹には、４つの翼と４つの頭があったとありますが、アレキサンダーが３２歳の若さで亡くなってから、４人の部下によって、ギリシャ帝国は４分割されて統治されました。
結局ギリシャ帝国は、ＢＣ３３３年からＢＣ６３年まで、合計２７０年間続いて滅びました。

Part Five

そしてついに、四頭目の獣です。

ダニエル７：７－８（パワポ）

この四頭目の獣は、これまでの獣とは、明らかに趣が違います。

これまでは、獅子や鷲、熊、豹などのように、現存する動物に例えられているのですが、この４頭目の獣は、どの動物にもなぞらえることの出来ない獣で、ただ、「恐ろしくて、不気味で、非常に強かった。」と記されています。

一義的にはローマ帝国を表しますが、それ以降に続く人間の作った世の中や、国々や、世界観まで表すものですね。

ダニエル書２章では、鉄と粘土で出来た足部分を表します。
ダニエル書７：７でも、「大きな鉄の牙を持っていて、食らってはかみ砕き、その残りを足で踏みつけていた。」という風に、巨大な像の足部分を連想させます。
ギリシャ帝国以降、ローマ帝国は、ＢＣ６３年から５００年間、世界の最強大国として、君臨した国です。

このローマ帝国の特徴は、「大きな鉄の牙を持っていて、食らってはかみ砕き、その残りを足で踏みつけていた。」という言葉で表されている、膨大、巨大、すさまじいほどの軍事力です。

ローマ帝国の特徴を、「寛大で、包容力のある文明だった」という作家もいますが、もちろんそれも一特徴だったでしょう。
しかし、ローマ帝国を理解する上で、大きな誤解を与えかねない表現でもあると思います。

ローマ帝国は、「寛大で、包容力のある」帝国である前に、抵抗勢力を徹底的に、残忍なほどに、踏みつけた、力で支配する恐怖国家でありました。

例えば、抵抗をした奴隷たちを、ローマに通じるすべての道で、十字架に架けて、火あぶりにして、人々を威嚇し、恐怖の念を心深く刻み込んだり、キリスト者を油で素揚げにすることもありました。

まさに、大きな鉄の牙で、食らってはかみ砕き、残れば、残飯を踏み潰すかのように踏みつぶして、巨大帝国を築き上げて行きました。

でも、その内実は、金でも、銀でも、銅でもなく、鉄と粘土です。

ギリシャまでの文明を淘汰し、吸収して、さらに発展させたと自負するローマ帝国の遺伝子は、現代にまでその影響を及ぼすほどに、ローマ帝国は栄えました。

ビサンチン帝国、神聖ローマ帝国、イスラム帝国、英国や米国、中国に至るまで、世界を掌握した強国の統治システムの元をたどると、ローマ帝国に至るものがたくさんあります。

例えば、オリンピックの主会場になるような大競技場は、（日本ならば、国立競技場、各サッカー場、野球場、ラグビー場等々）２０００年前にローマに建てられた円形競技場のコロシアムが元祖で、それを超える競技場様式は、現代でも思いつかいない程です。

英国、米国の議会の上下院システムや、日本の衆議院参議院の議会システムも、元をたどれば、ローマ帝国の元老院制度から来たものです。

現代の政治、経済、教育、建築、文化、芸術、スポーツにいたるまで、ローマ帝国文明を基礎にしているものが、多々あります。

でも、そんな輝かしい巨大帝国文明も、神の目から見れば、所詮、金でもなく、銀でもなく、銅でもなく、鉄であり粘土です。

## Conclusion

もっと詳しくお話ししたいのですが、時間が来てしまいましたので、この続きは、来週以降に見て行きたいと思います。

ひとまず結論です。

ダニエル７：１７－１８（パワポ）

マタイの福音書５：１８－１９（パワポ）

今日のこのダニエル書７章の啓示を見た私たちすべてが、
四頭の獣に惑わされる生き方ではなく、その獣の正体を冷静に見据え、決して滅びることのない神の言葉と、神の国に生き、その国を永遠に受け継ぐ、祝福された偉大な者として立てられていることを感謝し、日々、三位一体なる神様を褒めたたえていきましょう。

お祈りしましょう。

祝祷：ダニエル７：１８